認知症の方々も安心・安全な外出を担保できるまちづくり事業

沖縄認知症見守りコンソーシアム

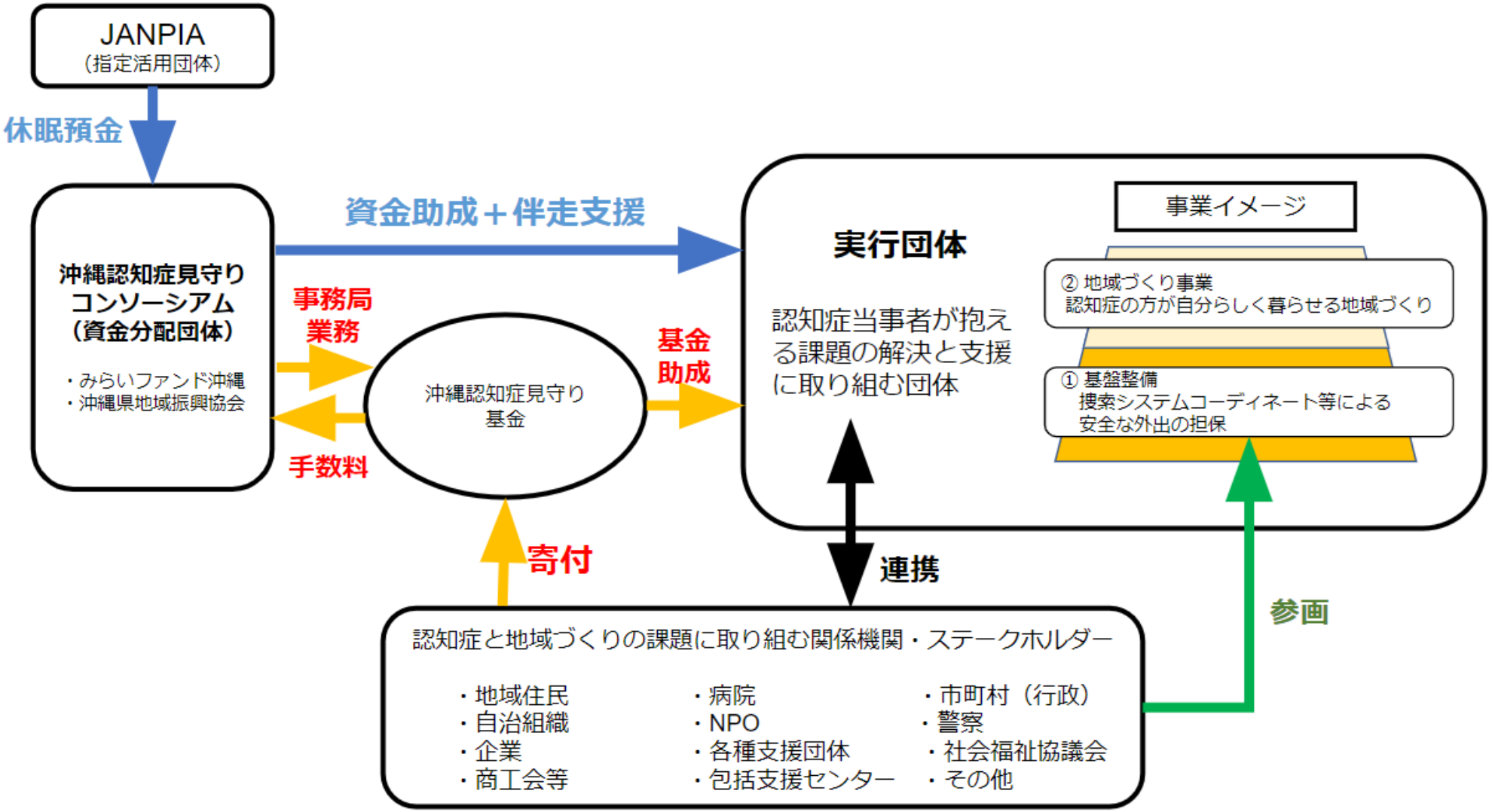
（幹事団体）公益財団法人みらいファンド沖縄

（構成団体）公益社団法人沖縄県地域振興協会

舞い上がれ
社会を変える
みんなの力

休眠預金を活用した事業です

スキーム図

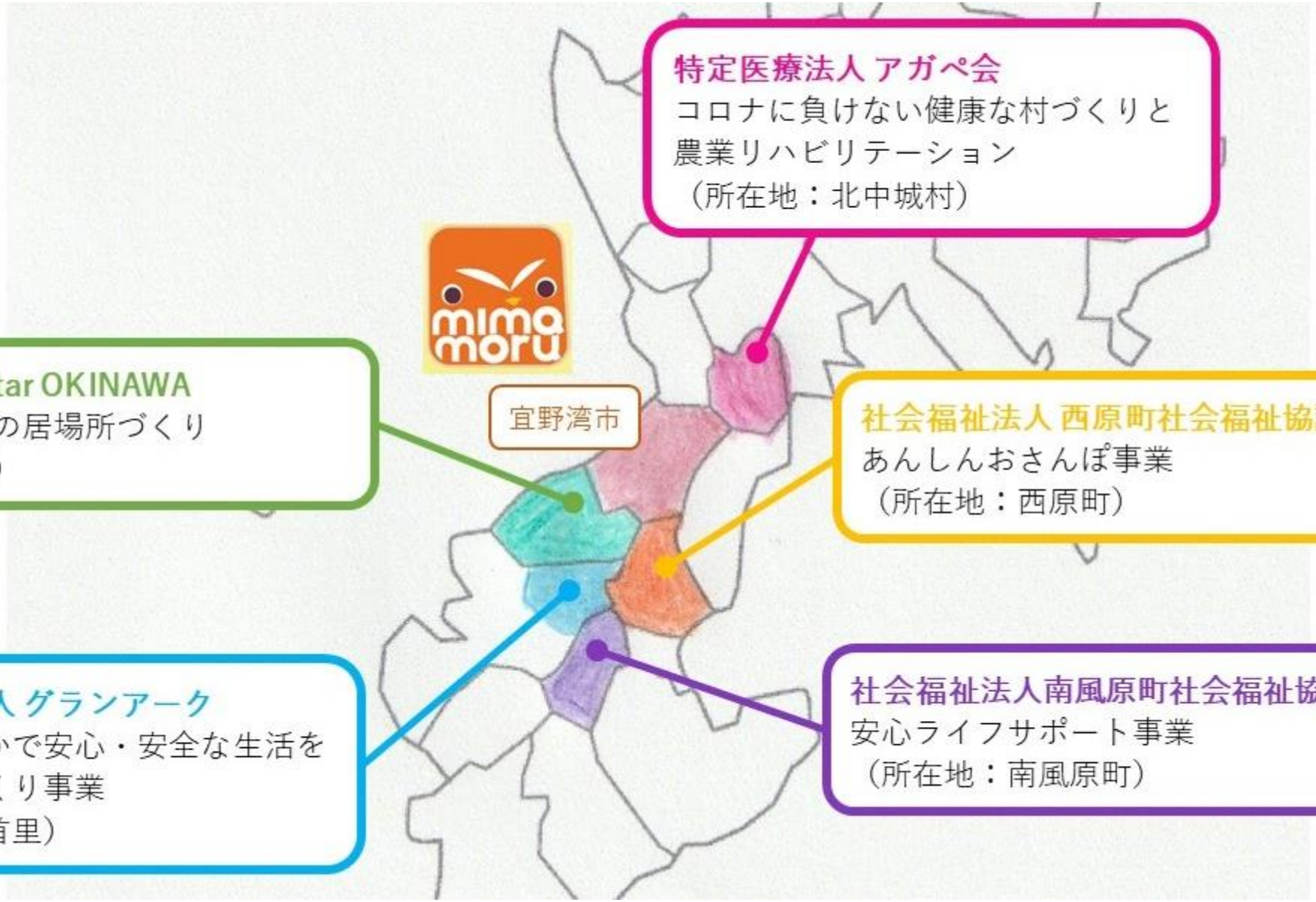

JANPIA
（指定活用団体）
休眠預金
沖縄認知症見守り
コンソーシアム
（資金分配団体）
・みらいファンド沖縄
・沖縄県地域振興協会
資金助成＋伴走支援
事務局
業務
手数料
沖縄認知症見守り
基金
基金
助成
寄付
実行団体
認知症当事者が抱える課題の解決と支援に取り組む団体
事業イメージ
② 地域づくり事業
認知症の方が自分らしく暮らせる地域づくり
① 基盤整備
捜索システムコーディネート等による
安全な外出の担保
連携
参画
認知症と地域づくりの課題に取り組む関係機関・ステークホルダー
・地域住民
・自治組織
・企業
・商工会等
・病院
・NPO
・各種支援団体
・包括支援センター
・市町村（行政）
・警察
・社会福祉協議会
・その他

捜索システム「ミマモライド」とは

「監視」ではなく「みまもり」　少ない人数でも捜索可能な仕組み

画像引用：市報ぎのわん　2021年9月号

実行団体紹介



特定医療法人 アガペ会
コロナに負けない健康な村づくりと
農業リハビリテーション
（所在地：北中城村）

合同会社 Green Star OKINAWA
若年性認知症の人の居場所づくり
（所在地：浦添市）

社会福祉法人 西原町社会福祉協議会
あんしんおさんぽ事業
（所在地：西原町）

特定非営利活動法人 グランアーク
認知症の方々も豊かで安心・安全な生活を
担保できるまちづくり事業
（所在地：那覇市首里）

社会福祉法人南風原町社会福祉協議会
安心ライフサポート事業
（所在地：南風原町）

■ 実行団体が評価を実践してきたうえでの（成功）事例

■ 資金分配団体としての中間評価

1. 実施内容

・先進地視察：東京都町田市　オレンジカフェ（認知症カフェ）でのフラットな場づくり、当事者の生活の一部を活用した見守り
・シンポジウム：福岡県大牟田市　基調講演 猿渡進平氏　大規模模擬訓練からの学び、当事者の声を聴く
・沖縄県内市町村における認知症高齢者施策に関する調査
・中間評価地域円卓会議

2. 事業の変更点

・視点の変化：（事業申請 時点）支援者の視点　→　（中間評価 時点）当事者の視点
大規模な見守りの仕組みの構築　暮らしの中で見守る小規模で個別対応可能な仕組みの構築
見知らぬ人に行方不明捜索してもらう　探してほしい人に探してもらう

■ 合同会社Green Star OKINAWA

沖縄県浦添市の福祉関係（子ども、高齢者）NPO法人運営に携わっていたメンバーが立ち上げた合同会社。
現在、設立3年目で居宅介護事業や子どもの居場所運営等を含めて事業展開。

■ 若年性認知症（65才未満で診断）の居場所づくり

認知症になることで子育てや仕事などに支障をきたしてしまうことや、若年性認知症の方々が過ごせる居場所がないことに着目
若年性認知症の方の居場所を開設し、そこで仕事をすることで収入を得る、就労につなげることで自立を目指す。

■ 事業実施上の課題

場所はある。若年性認知症の方もいる。
参加してもらえない。

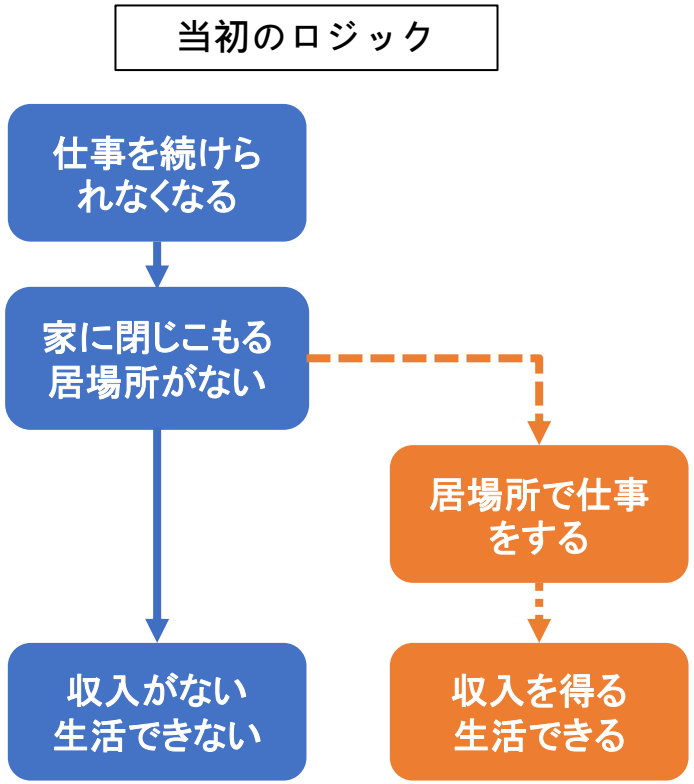
■ 実行団体が評価を実践してきたうえでの（成功）事例

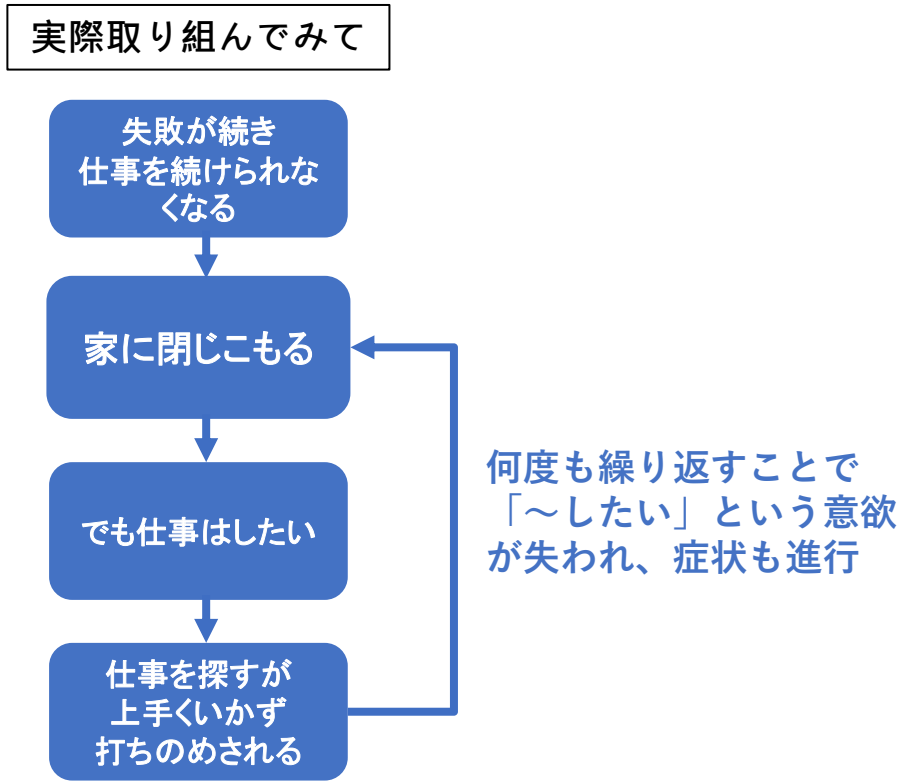
■ 問題構造分析

1．参加を断られた状況の分析

・低い工賃で働きたくない（実際に働いていたときは普通の給与水準だった）
・勤めているときに仕事の失敗が続くなどで就労意欲がない
・活動する意欲が著しく低下している
　など、状況は人によって様々

2．何が取り組むべき問題なのか





■ 実行団体が評価を実践してきたうえでの（成功）事例

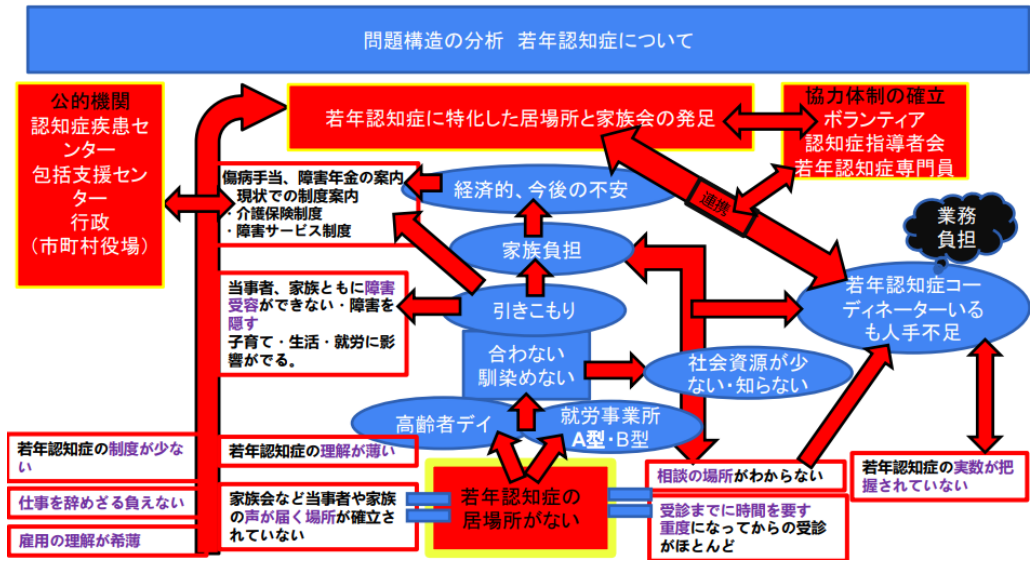
■　問題構造分析

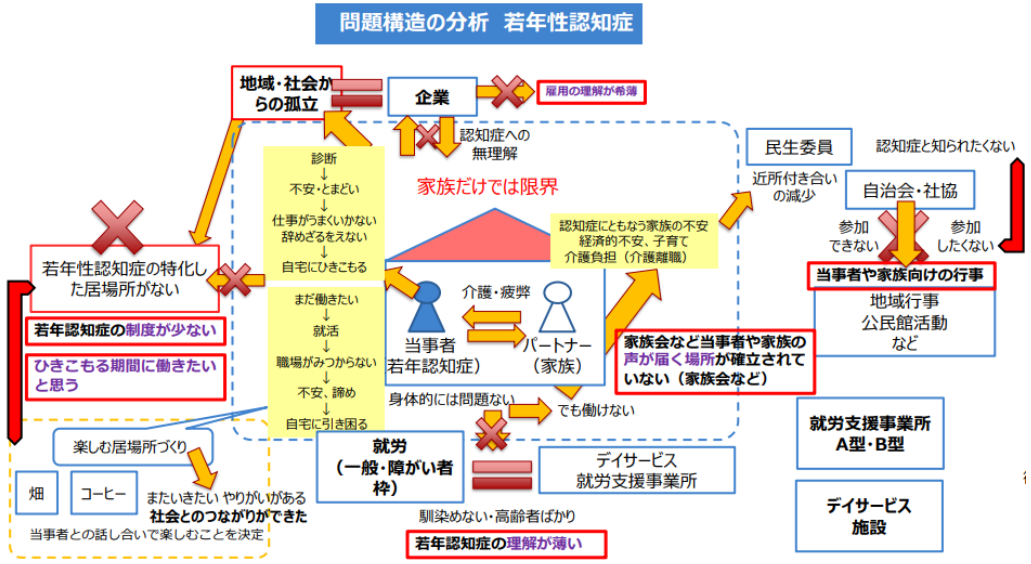
3．変更点

・仕事をして収入を得て自立を目指す → まずは自分のペースで何かの活動をすることで社会的な刺激を受けて、意欲が湧くことを目指す

「居場所で仕事をしてみませんか？」　　「ちょっと別の場所で過ごしてみませんか？」

・居場所で交流 → 居場所だけではない当事者同士の交流（当事者の多様な状況に対応したい）





■ 実行団体が評価を実践してきたうえでの（成功）事例

■　変化（2024年8月8日現在）

・居場所に通う人が２名に
Aさん（元看護士）発症時にミスが原因で激しく責められ引きこもりに。2024年3月から居場所に通い始め、家族からも「楽しそう」
就業意欲がなくお金へのこだわりもなかったが、内職の工賃を受け取ったときは「もう一度お金を貰えるとは思ってなかった、娘に全部あげる」とコメント。

・内職の受注数が2件に
コーヒー店（コーヒー豆の袋詰め）　琉球ガラス村（ガラス商品の検品、箱詰め）
慣れたら別の作業もお願いしたい、来年からは直接現場に来てやってくれると助かる、などの声あり。

・当事者の集い「同士会」
沖縄県認知症希望大使で若年性認知症当事者でもある大城勝史さんのサポートのもと月1回程度の交流会。参加者は3名
命名はメンバー。参加者が皆で行きたいところを次回の開催場所に設定、悩みの共有から趣味の話まで。

・高齢の参加希望者も
介護保険制度で実施するプログラムが合わないという人の問い合わせが複数

■ 事例から得た学び

■ 当初の仮説は間違えている場合もある

・専門職の仮説も違う場合がある
専門職ゆえのこだわりや想いなどがバイアスになることもある。（どうしたらいいんでしょうね？）
実施して初めてわかることもある。

・仮説が間違っている場合は間違っていた事実を受け止める
受け止めないと次の打ち手はほぼ間違えた打ち手になる。

■ 仮説やロジックは腹落ちすることが重要

・POが正しい仮説を示しても実行団体が腹落ちしなければ行動や結果は変わらない
今回は、実行団体の皆さんが頑張り続けてくれたおかげで、活動が変わり結果が変わった。